
安楽椅子に寝そべて 瞳の中の闇

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安楽椅子に寝そべって 瞳の中の闇

【Nコード】

N6263D

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

お祭り男品田が殺人事件に巻き込まれた？美奈子と水瀬は品田を助けるべく事件解決に奔走する！特に魔法とかなしの予定。推理っぽい作品を目指すべく頑張ります！

第一話

美奈子が、品田の様子がおかしいことに気づいたのは、午後の事だった。

普段からおかしいから、もしかしたら、もっと前からおかしかったかもしれない。

ただ、普段より桁外れにおかしいことに気づいたのが、午後だった。

窓際にたたずみ、遠くを見つめる目は、普通なら澄み渡った空を連想させるが、品田の場合、かなり危険な妄想に浸っているようにしか思えない。

はつきり、似合わないのだ。

「何か悪いものでも食べた？」

美奈子でなくても、そう言わずにはいられないほど、似合わない。

「アタマ打ったとか」

「なんでやねん」

普段なら激しく突っ込むところも、何か大人びた声になっている。

「桜井」

品田は、澄み切った目で美奈子に向き直った。

「ワイは生まれ変わったんや」

「ケダモノ以下に？」

「そう！ワイは単細胞生物に——なんでやねんっ！」

やっと普段に戻ったことに安堵しながら、美奈子は訊ねた。

「どうしたの？春はまだ遠いよ？」

「いちいちムカつく言い方するヤツやなあ……」

「あーっ！わかった！」

美奈子の横で声を上げたのは、未亜だ。

「品田君——誰か好きな子出来たんだ！」

「……どこのアイドル？」

品田は、いつもいつも、違うアイドル相手に「惚れた！」だの「めっちゃ好きや！」騒いでるせいもあって、美奈子にはそうとは思えなかったのだ。

「違うって！」

品田はムキになって否定した。

「あの子はアイドルやない！普通の子や！」

結局、品田は、誰のことか言わなかった。

ただ、一年年下。

おとなしくてカワイイ子。

だとしか言わなかった。

それでもしつこく食い下がった未亜によると、

どこか、体が不自由な子。

らしい。

別に関係ないけど、品田が間違いを犯さないことを、願うしかない。

美奈子はそう思って、それっきり品田のことを忘れた。

夜、その品田から、美奈子の携帯に電話がかかってきたのは、美奈子が葉子を寝かしつけていた時だ。

受話器の向こう。

品田は、ものすごくせっぱ詰まった声で、何かをわめいていた。

おかげで何を言ってるか、全然わからない。

美奈子は、水瀬を相手にした時みたい、怒ってなだめてすかして……ようやく品田からわかる言葉を引き出すことに成功した。

「——え？ち、ちょっと待って！」

「かけ直すから！番号は？」

美奈子は、慌てて番号をメモして、受話器を置いた。

「何？新しいカレ？」

ニヤニヤした母親の声は、背中で聞き流した。

「クラスメート！——お母さん、私、ちょっと出かけてくる！」

「水瀬君の所？」

「そう！今晚帰らないから！」

部屋に駆け戻り、コートと携帯をつかんで、美奈子は玄関から駆け出した。

「美奈子っ！」

走りながら、美奈子は、水瀬の携帯に電話をかけた。

「まずい！」

美奈子は、携帯の発信音を聞きながら、品田の言葉を思い出していた。

『桜井——警察に知り合いおらんか？ワイ……人殺しに巻き込まれた』

「成る程ねえ」

「丁度、理沙とも連絡がとれたのが幸いした。
場所は運河公園。」

美奈子と水瀬、そして理沙が引き連れた制服警官2人が公園に入る。

藪の中でゴソゴソする音がしたので、警官達がライトを向ける。

「きゃっ！」

「なっ！何だ！？」

そこには、あられもない姿を晒す男女の姿があった。

「ご、ごめんなさい！」

美奈子は思わず叫んだ。

「気にせず続けてください！避妊に失敗しないようにご注意ください！」

「……違うでしょ？」

理沙が一応、ツツコミを入れる。

運河公園の中でも一番奥の遊具広場で、美奈子達は目的の人物に出会った。

人気のないブランコの側で、抱き合う男女。

男は——品田だった。

「嘘お！」

美奈子には、目の前の光景が信じられない。

相手はものすごいカワイイ女の子だ。

ツインテールにした銀髪。

赤みがかった瞳。

不安そうに品田にしがみつく、怯えきった表情が何とも言えず愛らしい。

そんな子と“エロの司祭”とまで言われる品田が抱き合っているのだ。

「理沙さん」

その光景を前に美奈子は言った。

「とりあえず、ペド野郎が何かしようとしていますので、逮捕してください」

「普通ならそうしたいけどね」

理沙は、「現場確保」と制服警官に命令を飛ばす。

「桜井さん……品田君達の足下」

水瀬に言われて、美奈子は初めてわかった。

血溜まりの中、人が倒れていた。

死んでいることは、美奈子には経験でわかる。

「品田君」

美奈子は何とあえず、品田君に声をかけた。

「さ……桜井い！」

品田は、泣きながら言った。

「こ、この子は無関係や！この子の悲鳴がしたから、ワイ！ワイは！」

公園は封鎖。

中でいちやついていたカップルは片っ端から野次馬の視線を浴びながら外に出された。

パトカーの中で事情聴取を受けている品田を待ちながら、美奈子は心配そうに理沙に訊ねた。

「品田君、どうなるんですか？」

「あくまで発見者ということになるわ……事情聴取が終われば解放されるから」

「そういう、ものなんですか？」

「コージー品田っていえば、芸能人でしょ？ そんなのひっぱるといろいろ……ねえ」

「芸は身を助ける……ですか」

「そうとも言うわね——さて、美奈子ちゃんはもう遅いから帰きなさい。それと、水瀬君？」

「はい？」

「私は夜食を食べるからおごりなさい」

翌日。

「稲村財団の執事の一人？」

「そう」

水瀬は、美奈子に言った。

「工藤栄一32歳。独身。稲村財団社長本宅付執事。死因は頭部の貫通銃創から来る失血死」

「撃たれたの？」

「うん。22口径の通常弾頭。ソフト・ポイント射撃位置から推測すると、犯人は身長150センチ前後だから、かなり小柄」

「150センチ？ 大人じゃなくて子供の背丈よ？」

「うん」

水瀬は、お茶の入った紙コップに手を伸ばしながら頷いた。

「被害者も身長160センチって、大人の男にしては小さい方。発射角度から割り出す限り、150センチ位になっちゃう」

「拳銃？」

「弾丸が発見されていないから何とも言えないけど、多分ね」

「それにしても」

美奈子はコーヒークップを片手に言った。

「何？拳銃で撃たれるほどのこと、してたの？その執事さんは」

「それがねえ」

水瀬は椅子の背もたれに寄りかかりながら言った。

「稲村財団って、裏でいろいろあるらしくてね」

「裏？」

「うん——ここ10年間で当主2人に家族4人、執事や関係者も何人か死んでるんだって」

「何それ」

美奈子はあきれ顔で水瀬に言った。

「お金持ちって、そんな血生臭い世界なの？」

「異常だよ」

水瀬は美奈子からグミキャンディーをもらいながら、

「死因はほとんどが他殺。しかも迷宮入り」

「理沙さん、どうしてるの？」

「岩田警部と一緒に過去の記録当たってるはず。とにかく、品田君は発見者だけど、昨日のうちに解放されているし」

「そう……で？品田君、どうしてあの場所に？」

「それがね？」

水瀬は呆れた。といわんばかりにため息をついた。

「第一発見者の女の子。その子に一目惚れしたらしくて、ほとんどストーカーに近いことしてたんだって」

「やっぱり、逮捕するべきじゃ」

「名前もわかんない。住んでいる所もわかんない。だから、後をついていって、せめて姓だけでも知りたいって、その一心だったそうだよ」

わかるなあ。

水瀬は、腕組みをしながら何度も頷いた。

「それで、何で抱き合っていたの？」

「品田君、一度、公園の中で彼女を見失ったんだよ。」

そしたら、誰かが怒鳴るような声と女の子の悲鳴、それから、パ
ンッ。って音を聞いた。

品田君、なんだろうって、音のした方に向かったら、第一発見者の
あの子がいたって」

「別に、品田君が撃ったとか、そういうんじゃないんだ」

「品田君からは硝煙反応は出てないよ？」

「じゃあ」

「問題は、その第一発見者」

「そう！その子、誰？」

「……稲村財団の跡取り娘。葉月女子短大付属の中等部3年在学中」

「……ちよつと待って」

美奈子は、その学校名に心当たりがあった。

「葉月女短って——養護学校だよ？」

「そう」

水瀬は硬い表情で頷いた。

「彼女、目が見えないんだ」

第二話

「目が見えない？」

「そう。子供の頃から……何でもね？精神的なものらしいよ？」

「ふうん？」

「警察では、彼女が誰かに襲われて、それから護ろうとした被害者の工藤さんが拳銃で撃たれて死んだって見てる」

「それで？執事はともかく、その子が何で夜の公園なんて？」

「歩きたかった。本人はそう言ってるし、他の執事やメイド達の証言でも、彼女がよく外出することは裏付けがとれている」

「夜なのに？」

「目が見えなければ、昼夜関係ないよ」

品田は、午後になって登校してきた。

ネクタイはゆるみ、シャツの裾はズボンからはみ出し、頭は寝癖だらけ。

「うーす」

「おい品田、なんて格好だ？」

品田の悪友達でさえ顔をしかめる格好をした品田は、覇気のない声で答えた。

「格好なんてどうでもええ」

「かなめちゃんに怒鳴られるぜ？」

「どうでもええ」

乱暴に椅子に座り、手足を伸ばした格好で椅子の背もたれに寄りかかった品田は、視線の端に美奈子の姿を認め、腰を上げた。

「桜井」

「品田君——災難だったね」

自分の席で綾乃やルシフェルと話していた桜井が、不快そうに視

線を逸らした。

「まあ……スマンな。迷惑をかけた」

「ううん？とりあえずその格好何とかして」

「へ？」

「品田君、ズボン」

ルシフェルも品田から視線を外す。

「社会の窓が」

綾乃だけは何か困ったような顔をするだけだ。

「……あっ」

足もとを見た品田は、ズボンのファスナーが全開だったことに初めて気づいた。

「いゃん♪みなさんのエッチ♪」

「瀬戸さん。変質者がなんか言ってる」

「誰がやねんっ！」

「つまり」

ようやく普通に戻った品田は言った。

「ワイ、公園に入る鈴蘭ちゃんすずらんを見つけたのは、本当に偶然や」

「ストーカーしてたんじゃないくて？」

「アホ。相手は正真正銘のお嬢様やど？本当なら華雅女子に入っていて当たり前の娘や。ストーカーなんてそうそう出来るかい。ワイも仕事あるし」

「それで品田君は」

綾乃は気の毒半分、好奇心半分の視線で品田に言った。

「その鈴蘭さんの後をつけた」

「そうや。話すきっかけでも掴めればって」

「そんなにカワイイ子なんですか？」

「ああ——絶世の美少女や！」

顔を赤くして力説する品田。

絶世の美少女。

品田が綾乃を始め、何人ものアイドルをそう呼ぶせいで、随分価値がないように聞こえるが、品田の顔を見る限り、少なくとも品田は本気だ。

「色白の肌といい、あの心地よい香りといい——何ちゅうか、折れそうなほど細い体……思い出しただけで……ああっ♪昨晚は大フィーバーやった！一箱いったで！」

「な……何が一箱か聞かなくていい？」

美奈子は、品田が遅刻したことへの認識を改めた。

事件のショックじゃない。

話からするに、品田は昨晚、あの子を抱きしめていたことを思い出して——。

女子生徒がどん引きする中、品田の舌は動きまわった。

「エリ○ールよりシコ○ティ、じゃなくて、スコ○ティの方がええなあ——ワイは敏感なんや」

「……」

「……」

「……」

「まあ、それはそうと」

ずいっ。品田は机に身を乗り出した。

「桜井、鈴蘭ちゃん、今、どうしてる？」

「警察の捜査情報なんて私を知るはずないじゃない」

「……そうか。そうやな」品田は肩を落とした。

「本当に、その鈴蘭さんのこと、大切なんですね？」

「綾乃ちゃん。当然やんか」品田は綾乃に答えた。

「ワイはあの子に惚れたんや」

美奈子達は、その目に嘘を見いだすことが出来なかった。

「どうにかしろって言われても」

水瀬は、美奈子と綾乃を前に、困惑した顔になった。

「何をどうされたいの？」

「品田君と、その鈴蘭さんを結ばれるように！」

「監禁して媚薬でも投与する？品田君が犯罪者になるけど」

「そうじゃなくて！」

綾乃はいらついた声で言った。

「そういうのは、私にしてくれればいいんです——じゃなくて」

「瀬戸さん……」

「桜井さん、聞かなかったことにしてください」

絶対、負けませんから。

ポツリとこぼれたその声を、美奈子は聞き逃さなかった。

「だからね？」

美奈子は綾乃を押しつける形で言った。

「品田君と鈴蘭さんを、もう一度、再開させてあげたいのよ」

「ふうん？」

水瀬は、教室の窓から外を眺めながら、気のない返事をする。

「そんなんでいいの？」

「随分、なげやりだね。何？友達の恋愛に興味ない？」

「運命の女神様は」

窓の外に向けた視線を外さず、水瀬は言った。

「まだ品田君に微笑んでいるみたいだね」

「へっ？」

美奈子は、水瀬の横にぴったり寄り添う格好で窓の外を見た。

校舎の車寄せに高級車が一台横付けされていた。

そして、そこから出てきたのは——

背広姿の男達に囲まれた白い杖を手にした少女。

美奈子は、その顔に見覚えがあった。

「あ、あの子！」

「そう。だから、僕達の出る幕なんてない」

「成る程？」

「カワイイ子ですね」

水瀬と美奈子の間にさりげなく、しかし強引に割り込んだ綾乃が言った。

「ブロンドだなんて、ハーフでしょうか。うらやましいな」

「ぼ、僕は綾乃ちゃんのそのストレートの方が……」

水瀬は泣きそうな声でそう言う。

「ありがとうございます♪」

「お、お願い……綾乃ちゃん」

「はい？」

「足、どけて……お尻をつねらないで……痛い」

校内に放送が流れたのは、その時だ。

「2年A組、品田。面会です。大至急職員室へ」

第三話

さすがに用事のないのに応接室に近づくことはためらわれた。何しろ、横は校長室。反対側は職員室だ。下手に見とがめられたにアウトだ。いろんな意味で。

結局、美奈子達は品田が応接室から出て、教室に戻ってくるのを待つしかなかった。

「あっ、来た」

水瀬の言葉に、美奈子は思わずドアを見るが……。

「……」

言葉を失った。

品田が近づいてくる。

その光景に言葉を失ったのだ。

歩くたびに品田がワイヤーでつられているように、天井まで浮かび上がり、また床に降りるといった有様なのだ。

生徒達が全員、壁まで逃げているのも無理はない。

「う、有頂天とはこのことか」

羽山のあきれ声を、美奈子は否定するつもりさえない。

「うわーっ」

水瀬はそんな品田の歩き方に目を輝かせている。

「ねねっ！品田君、その歩き方、どうやるの！？教えて！」

「マネしちゃいけませんっ！とりあえず品田君！」

美奈子と羽山が品田の足を捕まえて床に引き下ろす。

「ど、どうしちゃったの!？」

「うっ、ぐふふふっ」

不気味な笑い声をあげる品田の目はかなりイッていた。

「な、何!？ 何かヘンな薬でも使った!？」

「おい品田! どこにアタマぶつけた!？」

「元からおかしいのが、ついにタガがはずれたんじゃないですか？」

「あ、なるほど。瀬戸さん、さすが」

「何でやねんっ!」

「つまり？」

「そや」

椅子に座った品田は、反り返って言った。

「ワイ、鈴蘭ちゃんの家に招待されたんや。お食事を是非一緒に
つて」

「彼女、目が見えないんだっけ？」

「桜井、よく知ってるなあ。そや。それが？」

「ううん? 一見、不幸だけど、でも、今の彼女限定で、いろいろ幸
せなんだろうなあって」

「……いちいち引っかかる言い方やなあ」

「だって、ねえ？」

美奈子が同意を求めるようにルシフェルや綾乃の顔を見る。

二人とも困ったような顔をするが、美奈子の言いたいことは理解
している様子だ。

「——まあ、ええ」

品田は手をパタパタ振りながら言った。

「ワイには関係のないこっちゃ」

「大ありじゃん」

「あーっ! 何着て行けばいいんや!？」

「普通でいいじゃん」

「お友達もいらっしゃったらは是非なんて言われたけど！」

「品田君のお友達？」

「だからって、何でついて来んねんっ！」

品田がどなるのも無理はない。

品田の後ろには、美奈子に水瀬、ルシフェルに博雅、羽山に涼子、南雲に未亜という、いつもの面々がいるのだ。

「監視よ。か・ん・し」

水瀬から金を巻き上げ、貸しドレスでお洒落した美奈子の言葉に、品田が苦い顔をする。

「まるで、ワイが鈴蘭ちゃんに、口では言えん様なことするって聞こえるで？」

「やっぱり、下心はあったんだ」

「ワイの鈴蘭ちゃんへの思いはプラトニックや！欲望丸出しの桜井その他大勢と一緒にすな！」

「――へえ？」

「それにしても品田君」

水瀬が感心したように言った。

「スゴい格好だね」

「そやろ？」

「っていうか……品田」

羽山があきれたような口調で言った。

「なんだ、その燕尾服は」

「正装や正装！これが一番やろうが！」

「新内閣発足かと思ったぞ？」

すれ違う通行人の半分がドレスアップした美奈子やルシフェル、

涼子に下心と羨望の視線を向ける一方、残り半分が、品田の場違いきわまりない格好に奇異の視線を向けてくる。

「いいんや！ワイは鈴蘭ちゃんの前で、無様な姿を見せたくないんや！」

「彼女、目が見えないんだろ？」

「――手術するんや」

品田はおもしろくない。という顔でそっぽを向いた。

「今度、手術する。絶対、成功して、初めて見るのはワイの写真にしたいって言うてくれたんや」

「……」

引きつった顔の女性達がお互いの顔を見合った。

品田が舞い上がるのも無理はない。

目の見えない美少女が、この世で初めて見た男。

そんな小説や漫画みたいな話に遭遇したのだから。

ただ、相手が品田では……。

「でも、品田君」

そんな中、水瀬だけは、感心したように言った。

「一人の女の子に、そこまでやれるなんて、本当に好きなんだね」

品田は水瀬にきっぱりと答えた。

「当たり前や」

一体、何のためにここまで高くしたのかと聞きたくなるほど高い塀に囲まれた広い屋敷。

それが稲村家。

品田達はその中、執事の一人に応接間に通された後、豪華な食事の並ぶ食堂へと案内された。

美奈子にとって、映画の中でしか見たことのないような長いテー

ブルに高い背もたれの椅子。

一見しただけでかなりの値打ちモノだとわかる室内装飾。

「本物のお金持ちの家ねえ」

「料理も豪華よ？」涼子はすでに食べる気満々だ。

「お待たせいたしました」

メイドに手を引かれながらやって来たのは、金髪ブロンドの少女。
青いドレスが白い肌によく似合っていた。

ピューッ

羽山が品のない口笛を吹き、涼子に足を踏まれた。

「くすっ。本日はようこそ」

「鈴蘭ちゃん。すまんなあ。こんなゴミ共まで食事に」

「いえいえ」

鈴蘭と呼ばれた少女はうれしそうに言った。

「私、食事はいつも一人なんです。たくさんの方が来てくださるって聞いて、とても楽しみにしていたんです」

「そか——おい。失礼すんなよ!？」

目が見えない割に、鈴蘭はかなり上手に食器を使いこなす。

むしろ——

「あーっ。恥ずかしかった」

食事が終わり、各自歓談となった時間。

水瀬と美奈子は、鈴蘭を中心になって騒ぐ仲間達とは少し離れた場所にあったソファアを占領していた。

「何よ。失礼するのかな言って、フォークとナイフの使い方わからないなんて」

「無理もないよ——どうぞ？」

美奈子のために冷たい飲み物をもらってきた水瀬が美奈子の横に座った。

鈴蘭の横では、品田が声マネ芸を披露して爆笑を誘っていた。

「品田君、元々実家はお寺だし」

「お箸以外、使っていないせい？」

「だろうね。ただ、礼節は知ってるはずだよ？あれでも得度してるんだから」

「——へっ？」

「つまり、お坊さんの資格は持ってるの。もったいないよねえ。あれほどの実力で」

「品田君が？」

「うん——ははっ。あれ、僕でも知ってるよ？」

「鈴蘭さんのために必死になってるね。あれ」

「うん。だから、声以外の芸はやってない」

言われてみればそうだ。

品田は、体の動きを使って笑いをとることを一切やってない。

「鈴蘭さんにわかってもらえないこと、何一つしてないよ」

「……少し見直した」

そう言う美奈子は、ルシフェルと南雲の姿が鈴蘭のそばにないとに気づいた。

「あれ？」

辺りを見回すと、二人の姿は柱の陰になる場所にあった。

「……？」

美奈子が気になったのは、二人の目だ。

まるで何かを警戒するような、そんな目をしていたのだ。

「……やっぱり、南雲先生にもわかるか」

ぽつり。と、美奈子の横で水瀬がつぶやいた。

「何が？」

「ううん？今はいい」

「納得出来ない」

水瀬が何かを言おうとした時だ。

「桜井美奈子様」

背後からの声に振り返ると、そこには高級そうなスーツに身を包んだ一人の男が立っていた。

まだ20代後半位の、執事としては若さを感じさせる男だ。

「失礼いたします。執事の一人で、戸部と申します」

「はい？」

「不躰な申し出で恐縮なのですが——お時間を頂戴出来ませんか？」

「私に？」

「はい——名探偵として知られる桜井美奈子様に、折り入ってご相談したいことが」

「……」

美奈子は思わず、水瀬と戸部という男を交互に見てしまった。

「僕も同席していいですか？」

水瀬は鈴蘭から目はずさずにそう言った。

「水瀬君が同席することを許していただければ」

「……やむを得ません」

戸部は目の前にいる小学生（戸部視点）に奇異の思いを感じつつ、頷いた。

「ここでは何ですから、どうぞ別室へ」

「はい」

美奈子は席を立った。

「それで？」

「お嬢様の件です」

歩きながら、戸部は言った。

「お嬢様は、命の危険にさらされています」

「先日のことですね？」

「はい——このままでは、お嬢様は……殺されます」
「詳しいお話を」

「……」

「でな！？おい。鈴蘭ちゃん？聞いてるか？」

「……えっ！？あ、はっははっ。聞いてますよお？」

第四話

戸部が美奈子達を案内したのは、執事達の控え室とおぼしき場所。パイプ椅子とテーブル。

カラーボックスの上にポットやコーヒーマーカーが置いてあるだけの、実に質素な部屋だ。

「お嬢様を、助けてください」

戸部は平身低頭、美奈子にそう言った。

「このままでは、お嬢様は殺されます」

「ち、ちよつと待ってください」

美奈子は困惑した顔で戸部を制した。

「私は、警察じゃありませんよ？それに、銃なんて使われたら、どうしようも」

「わかっています！」

戸部はそれでもすがりつくような目で言った。

「でも、銃や何かを使う前に、犯人を捕まえられれば！」

「あの……」

美奈子の横にいた水瀬が訊ねた。

「警察は？」

「依頼はしています」

戸部は悔しそうに言った。

「お嬢様が危ないと！何度も相談に！それなのに、何か起きてから相談に来てくださいといわんばかりの態度だ！おかげで、今回だつて危うく！」

「警察としては、政府関係者でもないのに身边護衛なんて出来ないもんねえ」

「桜井様！」

美奈子に縋り付く戸部の目は、自分が命を狙われても、こうはならないだろう程に追いつめられた何かをはらんでいた。

「お願いです！数々の難事件を解決したというあなた様ならば！」

「あ……あのですね？」

美奈子は申し訳なさそうに言った。

「わ、私は、事件が起きてからでないと……その、解決、出来ないんです」

美奈子の言葉は半分は本当だ。

警察からの依頼は、常に発生した事件の解決であり、事前の防止はその範疇に含まれていない。

というより、美奈子自身、経験したことはない。

「そこを何とか！」

戸部自身、それはおそらく知っているんだろう。

だが、だからといって、戸部自身、引くことは出来ない。

「あの戦争で天涯孤独、地獄の難民収容所で餓死を待っていた私達を救ってくださった先々代のご恩に、私は報いたいんです！」

難民収容所。

あの戦争で住処を失った人々を収容した施設は、各地に建設された。

暖房もない仮設住宅。

整備されていない上下水道。

最悪の衛生状態。

行き届かない医療。

わずかに支給され、最悪届かないことさえざらな食糧事情。

全ては、前例のない事態に対応することが出来ない厚生省の失態に帰結する。

稟議と空転する会議。

自己保身に汲々とする官僚達。

現場を知らない上層部。

厚生省の幹部達は、収容所を作り上げたことのみで全てを終わらせたと、本気で思っていたのだ。

あらゆる支援を、前例がないこと、そして、収容所の劣悪な環境を公にすることで、自分達の進退にかかわることを危惧し、一切、認めなかった。

また、収容所の数十キロ手前の歓楽街に慰安に来る病院関係者達はいても、難民に救いの手を差し伸べようとした医師達は、あまりに少なすぎ、それ故に、厚生省を動かすことが出来なかった。

そう、言い切れるほど、結果的に見れば、人々は難民に対して冷淡だった。

避難民となって、ここで死んだ者は実に数万に上る。

あの戦争において、帝国国民一般市民の犠牲者の実に3割が収容所で死んだとする記録さえあるのだ。

多くは着の身着のまま収容所に収容され、凍死したり、頻発した疫病、飢餓、病氣、様々な理由で死んでいった。

死体は、——時に生き残る見込みのない者まで含めて——後に“人捨て場”とまで揶揄された穴に放り捨てられる。

生き残った者達も、わずかな食料を奪い合い、互いに殺し合う。

山野に生える草木を食べ、毒に当たって死ねれば幸せ。

塩もなく草木を食べ、カリウム中毒で死ねれば幸せ。

死ねれば幸せだ。

収容所の人々は、本気でそう思っていたという。

生き延びるために死体の肉を喰ったなど、当然のような環境――
―この世の地獄を産み出した収容所。

収容所所長が、わずかな食料をちらつかせ、そんな中から女性、
年端もいかない少女、時には少年までを売春組織で働かせ、或いは
不当な低賃金で工場に送り込んで企業と共に私腹を肥やしても、収
容所の難民にとって、それで生き残れば奇跡とまで言われた。

戦後、帝国政府相手にかつての難民達が引き起こした訴訟は30
万件以上。

収容所所轄の厚生省は、一切の責任を認めていない。

厚生大臣は常に言う。

事実無根、もしそれが真実だとしても、それは現場の独走による
ものだ。

厚生省自体の責任ではないと。

事実、数万人を殺傷したに等しい収容所関係者で法的に裁かれた
者は一人としていない。

官僚組織と司法は、難民達の無念を切り捨て続けている。
闇に葬り去ろうとしている。

己達の保身のために――

日本の福祉と災害支援を語る時、憎悪と怨念によって長く語られることになる、別名“最終収容所”をなかったことにしたいのだ。

経緯は知らないが、戸部はそこにいたことになる。

そして、そこからどうやってか、この当主に救い出されたのだ。

戸部にとって、先々代は命の恩人以上の存在だろう。

かつて、収容所にいたことがある水瀬にはそれが痛いほどわかる。

「お願いします！桜井様！」

最後には土下座の上、頭を床にこすりはじめた。

「ま、待ってください！」

美奈子があわてて止めに入る。

「わかった！わかりましたから！」

その一言が、戸部にとってどれほどの救いになったか。

戸部の目によろやくともった希望の光が語っている。

「あ、ありがとうございますっ！」

「とりあえず」

戸部がコーヒーを用意してくれるのを見ながら、美奈子は言った。

「先々代は、何故お亡くなり呢？」

「ホール階段からの転落死です」

無駄のない動きでコーヒーをテーブルに置く戸部を、美奈子は感心した様子で見つめた。

「転落死？」

「先々代のお部屋はホール階段を上って二階奥でした。

早朝、メイドが階段下で倒れている先々代を発見。

すでにお亡くなりになっていました。

当時の警察の見解では、何らかの理由で、深夜、階段を降りようとして足を滑らせたんだらうと」

「あり得ること？」

「夜間でも照明はしっかりしてますし、何より、ホール階段は極めて緩やかです」

戸部は首を横に振った。

「先々代のお体のことも考え、階段は万全の滑り止め対策が施されていましたが、先々代は、階段横のエレベーターをお使いになられるのが常でした——お亡くなりなる半年ほど前、膝を手術された影響です。普段から杖を」

「普段使わない階段をその晩に限って使った？」

美奈子は首を傾げた。

「ありえそうにない話ね」

「警察は、どうしてそんなにあっさりと引き下がったの？」

水瀬が戸部に問いかけた。

「なんだか、警察は関わりたがらないって感じだけど」

「——その通りです」

戸部は悔しそうに頷いた。

「財団の不祥事、下手に関わると、どんな藪から蛇をつつくことに

なるか、それを警戒していたのでしょうか」

「――成る程？それじゃ、先代は？」

「交通事故で」

「交通事故？」

「はい。先代はお車が趣味で……奥様――鈴蘭様のお母様と静岡の別荘でお過ごしの際、遠乗りをされまして……ところが、どうしたものの、魔法瓶に入っていたコーヒーに睡眠薬が」

「それで事故死」

「はい……ガードレールを突き破って、海へ転落され」

「普通の死に方じゃないわ」

美奈子は、口を付けたコーヒーを、ちょっとだけ警戒して飲みながら言った。

「大体、それって、いつ頃の話？なんだか、それほどの時間は開いていない気がするけど？」

「はい」

戸部は言った。

「戦後わずか1年に満たない話です。先々代が亡くなられたのが去年の10月。先代が亡くなられたのが、今年の4月です」

「大体、半年で財閥の当主二人が？」

美奈子は目を丸くした。

「それ、噂になったでしょう？」

「はい」

戸部は悔しさと悲しさをない交ぜにした目を伏せた。

「呪われている。財産狙いの連続殺人……心ないマスコミからは連日取材攻勢……鈴蘭様も体調を崩された程で」

「……はあ」

美奈子はため息一つ、コーヒークップをソーサーに戻した。

「……で？今の当主は？」

「本来でしたら、鈴蘭様が就任されるべきなのですが、いまだ15歳。当主は18歳以上であることがしきたりです。現在は、家令が後見人として代行を」

「家令？」

「はい」

頷くと、戸部は辺りを見回した。

「実は——」

戸部はずいっと美奈子に顔を寄せた。

「この家令が——おかしいんです」

「おかしい？」

美奈子は首を傾げた。

家令といえば、戸部達執事にとって上司だ。

それをおかしい？

「家令の本名とされているのは、新田純一郎……年齢は65歳。後は、身長程度しか、何もわかっていないのです」

「何それ」

美奈子は眉をひそめ、戸部に訊ねた。

「まるで、家令が怪しい人物っていわんばかりじゃない」

「その通りです」

戸部は頷いた。

「家令の就任は10年前。就任の際、過去を一切告げないことを条件にしたそうです」

「よくそれで採用されたわね。家令って、重要な地位なんでしょう？」

「家令は、経営コンサルタントも兼ねていらっしやいました。10年前は、鈴蘭様の失明の他に、様々な問題で財閥が崩壊の危機にあった時です。家令は、その建て直しをやったのです」

「あ、それで」

水瀬は合点がいった顔で頷いた。

「それで後見人になれたんだ」

「おっしゃる通りです。実は——」

ジリリリッ

突然、ベルが鳴り響き、美奈子が驚いてコーヒーをこぼしそうになった。

「いけない。お呼びだ」

戸部は残念そうに席を立った。

「桜井様。本日はありがとうございました。あの」

「明日、また、お伺いします。何時頃がいいですか？」

「明日は非番なので——正午頃ならありがたいのですが」

「わかりました。水瀬君と一緒に」

どんな理由でもいい。

美奈子は、この屋敷にとどまるべきだった。

美奈子が、そう後悔することになるのは、すぐのことだった。

第五話

●桜井美奈子の日記より

11時に水瀬君と駅のロータリーで待ち合わせ。

10分ほど早く到着したので、最近、ロータリーに設置された奇妙な彫像を眺めながら、水瀬君を待つ。

ソファアールか何かにふんぞり返って、若い男に言い寄られ、ご満悦の表情を浮かべる女性の像。

タイトルは――

葉月市某女性議員の真実。

議会では立派な高説（私から言わせれば、机上の空論を振りかざしているだけ）をたれまくる市議会きつての論客である某女性議員が、夜な夜なホストクラブで豪遊する姿を忠実に再現したのがこの像だそうだ。

像の制作を依頼したのは、女性議員の反対勢力。

対する女性議員は、人権侵害で撤去を要請。

反対勢力は、撤去したら証拠写真と領収証のコピーを看板にしたてると息巻いていると聞く。

子供じみた馬鹿な話だ。

「ごめんね？」

そう言いながら走ってきたのは、もっと子供――じゃない。

水瀬君だ。

「ね、寝坊しちゃって」

「何時だと思ってるの？」

「僕じゃなくて、ルシフェが」
うわ。

下手な言い訳。

あのルシフェルさんが、寝坊なんて、するはず無いじゃない。

「本当だよお！」

ブーブー文句を言う水瀬君を連れて、私は稲村邸にむかう。

「あれ？」

稲村邸の前で、私は立ち止まった。

あまり、関わりたくない人達が、屋敷を出たり入ったりしているからだ。

白と黒のツートンの車に乗った制服姿の人達。

——警察だ。

「どうしたんだろう？」

水瀬君も首を傾げるけど……まあ、いいや。

私は、門の前に立つ警察官に訊ねた。

「あの」

警察官は無言で私達を睨む。

ひるんでたまるか。

「執事の戸部さん、いらっしゃいますか？12時のお約束が」

10分後——

私達は、稲村邸の一室にいた。

目の前には、いかにも刑事という人達と、背広をビシッと着込んだ銀髪の男性がいた。

「で？」

中年の刑事さんが厳しい声で、

「害者とは、どういう関係？」

「――えっ？」

私は意味がわからなかった。

「害者って？」

「えっ？」

刑事さんが眉をひそめた。

「あんた達、戸部さんが殺されたの、知らないの？」

「い、いえ……」

ちらりと見るが、水瀬君も首を横に振った。

「知りませんでした」

刑事さんによると、昨晚、戸部さんは私達が帰ってからすぐに、死体で発見された。

死因は頭部を鈍器で殴られたことによるショック死。

犯人につながるような遺留品は何もない。

「……そんな」

「確か、桜井美奈子さんだったね」

「はい」

「害者と昨晚、何か話していたという証言があるけど？」

「あ……」

どうしよう。

鈴蘭さんのことなんて、ここで言うことは出来ないし……。

「アルバイトの口をお願いしていたんです」

私の代わりに、そう言ったのは水瀬君だ。

「メイド服着たいから、アルバイトの口はありませんか？ って」

「——ふうん？」

刑事さんは、心底軽蔑したような顔になった。

「そのテの喫茶店でも行けばいいじゃねえか」

「ああいう、ハンパなのは嫌なんです。時給は安くてもいいから、お願いしますっていったら、待遇含めて、家令さんに相談してくれるって——ね？ 桜井さん？」

「え？ ええ！」

私は無理矢理、話を合わせた。

「そ、そうなんです！」

「だ、そうですけど？」

刑事さんが、横にいた銀髪の人に尋ねた。

「新田さん。何か聞いてます？」

「——いえ」

そうか。

この人が家令の新田さんだ。

戸部さんが“おかしい”と言っていた人。

すごく冷たい、なんだか機械を相手にした方がまだ愛想を期待できそうなほど、冷たすぎる人だ。

「戸部も困ったことをしてくれたものだ」

新田さんは、表情を変えずにそう言った。

「確かにメイドの数は不足しているが、かといって、家令である私に何の断りもなく、アルバイトの申し出を受け入れるとは」

ジロリ。

新田さんの目はすごく冷たくて、生理的な嫌悪感さえ感じてしまう。

「――住み込みになるが、それでもいいか？」

生まれてきた時に、愛想って言葉を忘れてきたに違いないほど、とにかくぶっきらぼうで、冷淡な声。

こんな人と半径1万キロ以内で同じ空気を吸ったら肺が腐ると思うほど嫌悪感を感じる声に、私は一瞬、全部を断ろうとさえ思った。だけど――

「衣食住、全て保証してくださいさるなら」

勝手にそう続けたのは水瀬君だ。

「募集は私達二人だけですか？」

「いや――四人だ」

新田さんは言う。

「この稲村家に対する流言の影響を真に受けた馬鹿な女が、辞めてしまったのだ」

「成る程？」

水瀬君は、少し考えてから言った。

「あと一人、私の方で斡旋できますが？」

その日の夜。

な……なんで、私がこんな服を？

私は鏡の前に立ってクルリと一回転してみた。

私は今、エプロンドレス。

俗に言うメイド服を着ている。

うーん。

確かにカワイイけどさ。

でも……。

「お姉さまぁ！」

突然、歓声をあげる女の子に背後から抱きつかれた。

「素敵です！カワイイですっ！」

抱きつきながら頬ずりまでするのは、黒髪をリボンでツインテールにした愛らしい女の子。

あの琥珀ちゃんだ。

水瀬君と一緒に行動できない時に備えて、ボディーガード代わりに手配してくれた子だけど……なんだか、この子、アブくない？

「うふふっ……お・ね・え・さ・まぁ」

そっ。

ち、ちよっと！

琥珀ちゃんの手が私の胸に回って――

や、やだっ！

ちよっ！

あんっ！

だ、だめ……この子……上手……んっ！

「ふふっ……お姉さま……カワイイ……食べちゃいたいくらい」

「こらっ！」

私はちよつと乱暴に琥珀ちゃんの手をふりほどいた。

「こ、こういう所で、そんなことしちやいけませんっ！」

「ダメですか？」

琥珀ちゃんはものすごい残念そうに言う。

それだけで、私が被害者のはずなのに、逆になんだか、私が悪いことしてるみたいにさえ思える。

ううっ……。

「と、とにかく！」

形勢不利をはねのけるために、私は強く言った。

「お仕事で着てるんだから、まじめにやるの！」

「はあい！」

琥珀ちゃんはうれしそうに言った。

「お仕事で来てるから、マジメに犯りまあす！」

「……字が違うでしょ？字が」

メイドの仕事なんて、要するに家事なんだから、普通にやってればいいんじゃないの？

私がそう思っていたのは、はっきり認める。

そういうの、きちんとこなせる姿、つまり、私が女の子らしい所を見せれば、ポイントが高いっていう打算もあった。

もっといえば、瀬戸さんを出し抜けるかもっていう期待があったんだ。

でも――

お皿12枚

今日、私が割ったお皿の数だ。

「元氣出してください」

夜、部屋に戻ってしょんぼりしていた私に、同室になった琥珀ちゃんがそう言って慰めてくれる。

「最初から、全部上手くいくなんてこと、ないんですから」

「――ありがとう」

本当、私の方が年上なのに。
情けないな。

「私達とは年期が違うんですから」

「そう？」

「はい♪私は――悠理君もか。家事全般、ほとんど毎日してますから」

「つまり――私がそういうの、してないのが原因だ？」

「その通りです」

「はっきり言われると……きついなあ」

琥珀ちゃんの言い分も最もなんだ。

普段から家事のお手伝いをしていれば、ここまで酷い結果にならない。

それをさぼっていた結果がこれだ。

好きな人に女の子らしい所、見せようと頑張って、逆の墓穴を掘る原因になった。

……ますます惨め。

「慣れるだけですよ」

ポンポン。

琥珀ちゃんが励ますように私の頭をなでる。

本当、優しい子だ。

水瀬君、何でこんな子をボディガード代わりに手配したんだろう？

「さあ！先にお風呂に入ってください。着替えは私が用意しておきますから」

「……ありがとう」

私は部屋のユニットバスに向かった。

「……」

お風呂上がり。

確かに、私は着替えはしたけど……。

「……」

「お、お姉さま！素敵すぎますっ！」

琥珀ちゃんが感極まった声をあげるけど……。

「これ……何？」

スケスケの短い布がcaろうじて胸からおへそのあたりを隠しているだけ。

ブラはなし。

ショーツもスケスケ……。

しかもサイドは——ヒモ。

「す、素敵ですう！」

「泣いてないで答えなさい——これは何？」

「お姉さまのために、私が仕入れました」
キレかかっている私に、しれっと答える琥珀ちゃん。

「ほ、他の普通のは！？」

「全部、処分しました」

「処分？」

「はい。それ一枚あれば不要ですから」

「私、バッグの中に」

「全部、焼却済みです」

「じ、冗談！」

「本気です」

「こんなの、水瀬君に見られたら！」

「いいじゃないですかぁ♪」

突然、琥珀ちゃんが抱きついてきた。

や、やだっ！

この子、恐ろしく力が強い！

「あんなガチホモ。お姉さまのこんな姿見ても、どうとも思いませんよ」

が、ガチホモ……。

ガチでホモ……。

水瀬君、やっぱり、そうなのかなあ。

「ふふっ。お姉さまのよさをわかってあげられるのは、私だけです」

っ、ついにベッドに押し倒された。

「ち、ちよっとストップ！」

私はあわてて琥珀ちゃんを止めようとした。

「や、やめっ！わ、私、この展開だけは考えないようにしてたっていうか、恐ろしくていまいち想像したくないっていうか！」

「最初のうちだけですよお」

琥珀ちゃんは目をらんらんとさせて言う。

「後は快樂が全てを凌駕しますからあ」

琥珀ちゃんの唇が近づいてくる。

その時だ。

ガチャ

不意にドアが開き、水瀬君がドアの向こうから顔を覗かせた。

——えっ？

み、水瀬君？

わ、私、今、どんな格好で、どんな状態にあるか、わかつちやっ
た……よね？

「あ、桜井さん？」

水瀬君、なんでもないって顔のまま、言った。

「明日、朝は7時に玄関ロビー集合だって。おやすみなさい」

ガチャ。

水瀬君、何でもないって顔でドアを閉めた。

「……」

つまり、私のこの姿、何とも思っていないってことだよね。

「ほらあ！」

琥珀ちゃんは勝ち誇った声で言った。

「ね？お姉さまのこんな姿見て、何とも思っていないんです。ガチでホモでしょう？悠理君って」

「……」

「で・す・か・らあ♪」

琥珀ちゃんが迫ってくる。

私、それに反応するのが一瞬遅れた。

「私が夜のお相手しまあす♪」

その晩……

私が、

私がどんな目にあったか。

それは私の胸の中に隠しておこう。

あまりと言えばあまりだった。

私、初めてだったのに——

「ごちそうさまでした♪」

満面の笑みを浮かべ、合掌までしてくれる琥珀ちゃん……。

「お姉さま……かわいかったあ♪」

頬ずりまでしてくる琥珀ちゃん。

本気で楽しそうだ。

お願いだから……誰にも言わないでね？

とりあえず、夜が明けたら、

絶対、

絶対、

水瀬君を殴ろう。

うん。

そうしよう。

第六話

「えっ？」

食器を片付ける手を止め、美奈子は水瀬の言葉に耳を疑った。

「明後日から別荘へ？」

「うん」

水瀬は手慣れた様子で食器を片づけていく。

「僕達も、同行だからね？」

「場所は？」

「神奈川県の日市」

「ふうん」

美奈子は、しげしげと水瀬の姿を眺めた後、ため息をついた。

「それにしても」

「何？」

「水瀬君」

「？」

「男の子で、そんなにメイド服が似合う子って、他にいないんじゃない？」

「そう？」

クルリと美奈子の前で一回転する水瀬。

その動きにあわせて、エプロンドレスの裾が愛らしいまでに舞う。

「……」

「ヘン？」

「思いつきり」

「そうかな」

「……もういい」

美奈子は食器を片づけると、水瀬に問いかけた。

「品田君も来るの？」

「そうじゃない？ 来客リストに品田様って書いてあったから」

「品田様……ね」

「何か不満？」

「殺人事件が起きたっていうのに、そんな所によく行けるなあって、お金持ちって、私達庶民には理解できない発想してるんだなあって」
「違うよ桜井さん」

水瀬はテーブルを拭きながら言った。

「別荘なら、外部との行き来全てを監視できる。だから、逆に安全だって判断じゃない？慣れない土地なら、お嬢様だってそうそう、抜け出しはしないだろうし」

「成る程？」

「何より」

水瀬は楽しそうに言った。

「殺人事件は、人里離れた洋館で行われなくちゃ」
「こらっ！」

3日後、水瀬達は財団保有の別荘へと移動した。

「つ……ついた」

美奈子は、車から降りるなり、お尻をさすった。

「な、なんで、メイドがトラックの荷台に乗って移動するわけ？」
「結構、揺れましたねえ」

琥珀が舐めるように美奈子のお尻をなで回しながら言った。

「お姉さまぁ。後でナメナメしてあげます♪」

「いらないっ！」

「それにしても」

水瀬は感心した様子で辺りの景色を見回す。

今にも降り出しそうな曇り空。
なま暖かい風

そして、切り立った崖の上にそびえる洋館。

全てが、出来すぎなまでに揃いすぎている。

「雰囲気あるねえ」

「楽しいことがありそうですね。お姉さま？」

「み、水瀬君、お願い」

美奈子は泣いて水瀬に頼み込んだ。

「部屋割変えて」

「いいよ？」

水瀬はあっさりと認める。

「本当！？」

「うん」

「じゃ、琥珀ちゃん！そういうことで！」

「はあい！」

琥珀は満面の笑みを浮かべて頷いた。

「それにしても桜井さん」

水瀬は感心した様子で言った。

「そんなに琥珀ちゃんと一緒に部屋になりたいなんて、仲いいんだね」

「――へっ？」

「ここ、僕と桜井さんで部屋割りされていたんだけど、琥珀ちゃんが一人だから、心配してくれているんだあ」

「ち、違っ！」

「琥珀ちゃん。仲良くしてあげてね？」

「はあい！」

「は……はめられた」

「ふふっ。どうせそう来るだろうと思って、最初から部屋割り細工

しておいたんです♪」

部屋に移動し、荷物を置いた美奈子に、琥珀は楽しげに言った。
木製の二段ベッドと粗末なテーブルにボロいテレビだけがある殺風景な部屋だ。

「知恵の勝利です」

琥珀がVサインまで出してそう言っただけなのに、逆に美奈子の逆鱗に触れた。

「……あのね？」

美奈子は覚悟を決めた。

「琥珀ちゃん。私は！」

「……ですか？」

「へっ？」

「お姉さま……ぐすっ。そんなに私のこと、お嫌いですか？」

琥珀は泣きそうに目を潤ませながら、美奈子に近づく。

「私、本当にお姉さまのことが」

「だ……だからね？」

年下の女の子が思い詰めた表情で迫ってくるなんて経験のない美奈子は、後ずさりながら、なんとかフォローしようとするが……琥珀の方が数枚上手だった。

「ううっ……そんなに私、お姉さまに嫌われているなんて！」

わーんっ！

途端に泣き崩れる琥珀に、美奈子はただオロオロするだけだ。

ドアが開き、隣室の水瀬が駆け込んでくる。

「ど、どうしたの！？琥珀ちゃん！」

「水瀬くん！」

琥珀は水瀬に抱きついて叫んだ。

「お姉さまが、ひどいんですう！」

「なっ！？」

「えっ？」

「お前なんてベッドで寝るな、犬小屋でも探して寝てろとか、飯な

んで、ゴミ捨て場の残飯で十分だとか、同じ空気を吸うだけで肺ガ
ンになるとか!」

「――桜井さん?」

水瀬が怒った顔で言う。

「少し、ヒドすぎない?」

「ち、違うっ!」

美奈子は両手をバタバタさせ、否定した。

「私、そんなこと言ってない!」

「でも、ここで二人で生活していれば、きっと……グスツ。きっと
わかってもらえます!」

琥珀はけなげさを前面に押し出し、言っただけだ。

「私、頑張りますからっ!」

「――うん」

にこりと笑うと、水瀬は優しく琥珀の頭をなでた。

「琥珀ちゃんなら、きっと大丈夫だよ」

「はいっ!」

「桜井さん」

「だからっ!」

もう美奈子は滝のような涙を流している。

「わ、私っ!」

「仲良くしてあげてね?」

「……っ!」

水瀬に念を押されたことが一番響いたのか、美奈子は結局、琥珀
と同室になった。

別荘は二階建て。

倉庫を兼ねる地下は一階。

部屋数は全部で20。

水瀬達メイドは、玄関前ロビーに集められた。

明治年間に建てられたという年代物の建物内は、よく見るとかなり手の込んだ作りになっている。

カーペット一つでもかなりの値段がすることは、もう経験でわかるようになっていた。

美奈子は、そこに並ぶ面々の顔を覚えようと、家令の新田の言葉に聞き入ることにした。

「新顔もいるようだから、各自を紹介する。別荘付きメイドの東^{あずま}」
30代半ばだろう、メイド中で一番年かさのメイドが頭を下げた。
神経質そうな顔立ち。

本能的に、美奈子は怒らせないように気をつけようと思った。

「同じく別荘付きコックの岩淵」
年の頃は40代。やたら鼻の大きい、でっぷりと太った男が軽く頭を下げた。

「そして、本邸から回された水瀬、桜井、武原の三名」
美奈子達と一緒に礼をした。

「今回、この別荘には、お嬢様と主治医の磯部医師、お嬢様にとって叔父にあたる佐伯様^{さへんぎ}ご夫妻、同じく叔父の水谷様ご夫妻、品田様……様がお越しになる。粗相の無いように。到着時刻は——」

美奈子は、最後の数名を聞き逃した。

「とにかく、本邸と同じようにすればいいんでしょう？」

ベッドのシーツを整えながら、美奈子は言う。

「そうだね」

テーブルを整えていた水瀬は頷く。

「それにしても、品田君も本当に来るとは」

「そういえば、品田君と、あと来るの誰だっけ？」

「僕、聞き逃した。ま、いいよね？ ようはメイドの仕事すればいいんだから」

「そうね……問題なければ」

「ねえ、桜井さん」

「何？」

「もう、犯人はこの別荘にいると思う？」

「ううん？」

美奈子は、ようやくシーツの準備を終えた。

本邸では先輩メイドに散々怒られ仕込まれ、ようやくここまで出来た。美奈子はそれに満足した顔で水瀬に答えた。

「まだ来ていない。来るとしたら」

「来るとしたら？」

「これから来る中にいるはず。私はそう見ている」

「いらっしやいませ」

玄関先の車寄せにリムジンが横付けされ、出てきたのは鈴蘭と――何故か品田だった。

別なリムジンから降りたメイドや主治医達が、その後続く。

燕尾服に身を固める品田が、真剣な顔で鈴蘭の手をとり、玄関の中へと消えた途端、通り過ぎる間、ずっと下を向いていたメイド達が一斉に吹き出した。

あの東メイド長までだ。

どうやら、能面のような顔は元かららしい。

美奈子はそう思った。

「わ、悪いけどさあ」

「お、おかしいよね？」

「見た？あのクソマジメな顔！」

「こ……これ」

たしなめる東も笑いを抑えるのに必死だ。

おそらく、品田は鈴蘭にエスコートを頼まれ、本気でその大任（本人視点）を果たしたのだが、悲しいかな。お笑い芸人がそれをやっても、ギャグにしかないのだ。

「出落ち芸人の面目躍如だね」

「こら」

水瀬を美奈子がたしなめた時だ。

続いてベンツが次々と横付けされた。

出てきたのは、アルマーニのスーツに身を包む、中肉中背の男。

そして、派手なドレスに身を包む女。

対照的に、人の良さそうな質素なスーツに身を包んだ男とその妻らしい着物姿の夫婦。

そして、髭もじゃのだらしない格好をした大学生風の男だ。

「いらっしやいませ」

メイド達が頭を下げるのを、アルマーニ男達は、まるで無視する形で玄関の中へと消えていく。

対照的に、質素なスーツの男達は、一々メイドに挨拶しながら通り過ぎ、大学生風の男は、それにつられる形で頭だけを下げていく。

「最初のが、叔父の佐伯夫妻だね」

頭を下げつつ、水瀬は小声でそう言った。

「何か、イヤな感じの人ですね」

小さく舌を出しながら、琥珀も一行の様子をうかがう。

「琥珀ちゃんでもそう思う？」

「あの人達、ロクなことしてませんよ？特に最初の奥さんの方」
「——へえ？どうして？」

「男の死霊と生き霊に水子にワケわかんない女の霊がゾロゾロとついでました」

「……視えるの？」

「はい♪」

そして、最後に入ってきたのは、あろうことかパトカーだ。

「車、どこ止めたらしいの？」

運転席から顔を出したのは——理沙だ。助手席には岩田までいる。

さらに——

「な、何で？」

水瀬達は目を見張った。

パトカーの後席から降りてきたのは、あろうことか、綾乃だったのだ。

「どうしたの？」

綾乃に紅茶を出しながら、水瀬は訊ねずにはいられなかった。

「品田君からお誘いを受けたんです」

綾乃は、チラチラと水瀬の格好を見ながら答えた。

「目に見えない女の子を励ましたいから、力貸してくれて」

「それで？」

「はい。手術が近いんでしょう？私のファンの子だとも聞きました。私、少しでも励ますことが出来たらって」

「それしか、事情は聞いていないの？」

「品田君からは……というか、悠理君？」

「あ、これ？」

水瀬はメイド服を指さした。

「一応、僕、ここでは女の子になってるから」

「女装の趣味が高じましたか？」

「……気を悪くするよ？」

「ふふっ。ごめんなさい」

綾乃は微笑みながら軽く手を合わせた。

「理沙さんからいろいろと聞きました。大変なことが起きているのですね？」

「うん」

同じ頃、美奈子は琥珀と一緒に、東の後ろを歩いていた。

手にはティーセットの乗った銀の盆がある。

目的は、応接間にいる鈴蘭の主治医である磯部医師にお茶を出すため。

美奈子達がお盆の中身をこぼさないよう、細心の注意を払いつつ、東に続いて廊下の角を曲がろうとした時だ。

「あの」

不意に、廊下の角で声をかけられた。

振り返ると、鈴蘭が、杖をついて一人で歩いていた。

「お嬢様！」

東が驚いてすぐに鈴蘭に駆け寄る。

「どうしたのですか？こんな所へ！お付きのメイド達は！？」

「こっそり抜け出しちゃいました」

小さく舌を出し、はにかむ鈴蘭の様子は、端から見ても愛らしい。

「もうっ！何をやってるのですか！」

東は鈴蘭の肩をしっかりと掴んでいらだった様子だ。

「……ごめんなさい。ただ」

「ただ？」

「磯部先生、タバコをお忘れだったみたいで」

鈴蘭は、片手に持っていたタバコを東の前に差し出した。

「これをわざわざ届けに？」

「はい。先生、いつもタバコの匂いをしておいでです。なくなったらお困りだろうと思って」

「まあ……」

鈴蘭の思いやりに感動したのか、東はしっかりとタバコを受け取ると、涙声で言った。

「私がきちんと先生にお渡しいたします。ありがとうございます」

「じゃ、お願いしますね？」

鈴蘭はほほえむと、杖で辺りを探りながら、今来た廊下を歩き出す。

美奈子は、その慣れた様子にしきりに感心するだけだ。

「目が見えないと、結構危ないと思ったんですけど」

東の指示で、琥珀が鈴蘭に付いていくことになったのを見送り、美奈子は東に付き従って応接間に向かう。

「鈴蘭様は、それはそれは努力されたのです」

「ご存じなのですか？」

「ええ。事故を恐れて、鈴蘭様は失明されてからしばらく、ここにお住まいでしたから」

「成る程。それで」

美奈子がさらに何かを言おうとした時だ。

応接間からすさまじい怒鳴り声がした。

誰かが言い争っている様子だ。

声からして、片方は、家令の新田だ。

困り果て、ちらと東の顔を美奈子が見た途端、荒々しくドアが開かれ、新田が応接室を出ていった。

「東！」

「はい」

「こっちへ！」

「はい。桜井さん？お茶とこれ、お願いしますね？」
東は、タバコを盆に置くと、新田の後を追った。

「失礼いたします」

一礼の後、美奈子は応接間に入った。

重厚な装飾が施された室内。

白衣を着た銀髪の男が、厳しい視線を美奈子に向けてきた。

鈴蘭の主治医、磯部医師だ。

「お茶をお持ちしました」

「ああ———そうか」

磯部医師は、ばつが悪そうな笑顔を浮かべ、ソファーに腰を落とした。

「済まなかったね。聞こえたらう？」

「はい」

「だが、聞いてくれ」

磯部医師は、ポケットをあちこち探り出す。

「鈴蘭様から、先生にタバコをと」

「ん？どこかで落としたか？」

美奈子からタバコを手渡された磯部医師は、さらに顔をしかめた。

「おかしいな。今朝、買ったばかりで封を開いた覚えはないんだが」

「それで、何かございましたか？」

美奈子はこの時、ティーカップに紅茶を注ぐことに意識を向けていた。

磯部医師が何をしていたか、全く見ていなかった。

「ああ。鈴蘭君を、別な医者に診せろと言ったんだ」

「先生がいらっしゃるのに？」

「専門外だ。私は眼科なんでね」

「鈴蘭様、他にもお悪いところが？」

「これは、医師としての推測だが」

シュボッ

ライターの着火音が美奈子の耳にかすかに入った。すぐに、美奈子の鼻がタバコのおいをかぎ取る。甘い、桃のような不思議な匂いだった。

「鈴蘭君はおそらく――」

ガタッ！

美奈子は、磯部医師がどこか家具に足でもぶつけたかと思った。ティーカップをソーサーに乗せ、ようやく振り返ったのは、その音が響いてから少し後のことだ。

「お待たせいたしました――えっ？」

磯部医師が、床に倒れていた。

それだけじゃない。

まるで両手で自らを絞め殺さんばかりの勢いで締め上げている。見開かれた目。

口から大きく飛び出た舌。

全てが、磯部医師に異変が起きたことを示していた。

「先生！？」

ティーカップをテーブルに置くと、美奈子はあわてて磯部医師にすがりついた。

「先生、しっかりしてください！先生！」

「ぐ……ガッ……ゴポッ」

磯部医師の口からはき出されたなま暖かい液体が、美奈子の手にもかかった。

血だ。

「――ヒッ」

思わず磯部医師から身を放し、後ろに後ずさった美奈子は、大声で叫んだ。

「だ、誰か！誰か助けてええっ！」

第七話

美奈子は震えながら、理沙のかけてくれた毛布にくるまった。床に倒れる磯部医師の死体は絶対に見ないようにする。

「どう？」

落ち着かせようと、美奈子の髪を撫でる理沙が水瀬に問いかけた。美奈子が振り向くと、水瀬が床にはいつくばる格好で、磯部医師の死体の口元に顔を近づけている。

クンクンと水瀬の鼻が動く。

まるで横たわる磯部医師に人工呼吸しているような姿勢を前に、琥珀があきれ顔で、

「ホモの上にフケ専だったとは……」

「こら」

理沙が琥珀の頭を軽く叩いた。

「そういう発言は慎みなさい」

「はい」

「青酸カリ……正確には青酸ガスですね」

磯部医師の死体から顔を離れた水瀬は言った。

「タバコに仕掛けられていたと見るべきでしょう」

水瀬の言葉に、皆の視線がテーブルの上に置かれた灰皿と、タバコの箱に集まる。

タバコはどこでも売っている市販のそれ。水の張られた灰皿には、一本だけ吸いかけのタバコが浮いていた。

「桜井さん、磯部先生に感謝すべきだよ？」

突然、水瀬からかけられた声に、美奈子は驚いて水瀬を見た。

「ど、どういうこと？」

「磯部先生、タバコを吸って、すぐに異変に気づいた。そして、あわててタバコを消した。そのおかげで、桜井さんは致命的なレベル

で青酸ガスを吸わずに済んだ」

「……」

「ま、世の中、何がどう影響するかわかんないよね」

水瀬はそう言って、ほほえんで見せた。

その微笑みが、美奈子の心をほぐしたのか、美奈子は小さく微笑み返すことが出来た。

警察からの事情聴取を受けた後、美奈子はメイド長、東のはからいで一晩、仕事を休むことが許されたが、美奈子はそれを断った。動いていないと怖い。

それが美奈子の言い分だ。

警察が出入りする別荘。

そこは、美奈子にとって勝手のわからない別世界でしかない。

どこかに閉じこもっても、結局はその世界にいることに変わりはない。

なら、誰かと一緒にいて、何かしている方が絶対安心できる。

人の存在を身近に感じながら、動いている方が恐怖を紛らわせることが出来る。

美奈子はそう思った。

東は、それを聞くと、水瀬と琥珀を美奈子と三人で行動するように命じてくれた。

そして――

「お茶です」

美奈子達は、現場に残った刑事に午後のお茶を振る舞っていた。地元の警察署の刑事だと、美奈子は聞いた。

「おう。すまねえな」

美奈子の事情聴取をした刑事が、懷からタバコを取り出し、口にくわえる手前で動きを止めた。

しげしげとタバコを見回し、それでも何か引っかかるのか、タバ

コを箱に戻し、懷にしまい込んだ。

「気になりますか？」

お茶を刑事に手渡しながら、悪戯っぽく訊ねる琥珀に、刑事はバツが悪そうに言った。

「そりゃ、これがもし、無差別殺人目当てならやべえだろ？」

「ふふっ。刑事さんでも怖いんですね？」

「そりゃ、お嬢ちゃん」

刑事は苦笑いした。

「俺だって人間様だ。怖いもんは怖い」

「はあ……そうですよね」

他の刑事にもお茶を出すと、琥珀は灰皿をテーブルに置いた。

「でも、好きなモノは好きなのはですから」

「ははっ……そのうち吸っちゃまうか」

「そうです♪」

「……にしても」

暇なのか、琥珀と話し込む刑事達を後目に、美奈子と水瀬は鑑識へのお茶の準備にとりかかる。

やっだあ！

あーっ！それセクハラですよお？

背後からは琥珀と刑事達の楽しげな会話が聞こえてくる。

「琥珀ちゃんも気を遣ってくれてるんだ」

「え？」

突然の水瀬の言葉に、美奈子は正直、とまどった。

「あれ、天然じゃないの？」

「意図的だよ」

水瀬は薬缶のお湯を急須に注ぎながら言った。

「琥珀ちゃんは、グリムさん以外の男はダメなんだから」

「へえ？」

「琥珀ちゃん、男は恐怖の対象なんだよ」

「……信じられない」

美奈子がちらと見た視線の先では、琥珀が刑事相手にじゃれていた。

「ホステスが好きでもない男といちゃつけるのと同じだよ」

「たえが酷すぎる気がする」

「琥珀ちゃん、そういうお店ならナンバーワンになれる」

「こら」

二人はお茶を準備する手を止めることなく、話し続ける。

「ところで水瀬君」

「何？」

「どう思う？」

「事件のこと？」

「そう。一体、何で磯部医師が殺されたか」

「やっぱり他殺？」

「事故死の可能性は低いでしょ？」

「うん……でも、はっきり言えることは一つ」

「何？」

「桜井さんがケンカ売られたってこと」

「私が？」

美奈子は思わず自分を指さした。

「そう」

水瀬は平然として頷く。

「もう、桜井さんは犯人に二回もしてやられている。一つがああ執事さん。そして今回の磯部医師」

「……」

「桜井さんは、探偵としてここに招かれた。にもかかわらず、依頼主は殺され、目の前で第二……第三か、犠牲者を出した」

「……」

「これで自分まで被害者だなんて、泣き寝入りする桜井さんじゃないと信じてるけどね？」

美奈子には、水瀬が何を言いたいかわかる。

探偵として救いを求めてきた執事の戸部。

そして目の前にいながらみすみす殺されるのを止められなかった磯部医師。

この責任は誰にある？

桜井美奈子。

お前にあるんだ。

お前がどう考えているかなんて関係ない。

二人の死を前に逃げるな。

解決はお前にしか出来ないんだぞ。

水瀬はそう言っているんだ。

「……」

はあっ。

しばしの沈黙の後、美奈子は大きくため息をつくと言った。

「……わかった」

「さすが♪」

水瀬は満面の笑みを浮かべたが、

「ギャラは水瀬君から徴収する」

美奈子のその一言の前に凍り付いた。

「えっ!？」

「一億円かな? ううん? 十億はもらわないと」

「さ、桜井さん?」

「払えなきゃ、体で払ってもらってもいいなあ……死ぬまで私に逆らわないって条件で」

「め、滅茶苦茶だと思いませんか? 高校生にどうやって一億も?」

「知らない♪」

鼻歌交じりに、美奈子は底意地の悪い顔で、お茶の道具を片づけ始めた。

「私をやれやれって、けしかけた以上は、水瀬君にも相応の代償を支払ってもらわなくちゃ」

「ぜ、前言撤回！」

「却下」

美奈子にはべもない。

「あっ、そうだ。琥珀ちゃんにお願いして、グリムさんから服従石譲ってもらおうかな。あれ、すごい効果があるし」

「……ううっ」

「恨めしそうな顔してもだめ。琥珀ちゃん？戻るわよ？」

「あっ、はあい！」

「え？」

台所に戻ったところで、理沙に呼び出された水瀬達は、理沙の言葉に目を丸くした。

「手がかりって、これ？」

場所はメイドの控え室。

理沙と岩田、水瀬と美奈子の四人が座るテーブルの上に置かれたのは、小さな金細工。

100円玉ほどのサイズだが、彫刻が施された細工は見事だ。

「そうだ」

岩田は渋い顔で頷いた。

「弓矢と眼鏡——弓矢は犠牲者の戸部氏のポケットから。眼鏡は磯部氏のタバコの箱に入っていた」

「へえ？」

水瀬は金細工をつまむと手のひらで転がした。

「高そうですね」

「ああ。細工のクセから見て、同一人物による制作と見ていいだろ

う」

「あの」

水瀬の手の上を転がる金細工を見ながら、美奈子が岩田に尋ねた。

「こんな物が、手がかりなんですか？」

「そうだ」

おや？という顔で岩田は言った。

「桜井さん？ いいかい？ 同一人物の制作した金細工を犠牲者二人が持っていた。おかしいと思わないか？」

「……あっ」

「そういうことだ」

「あの」

美奈子が何か言おうとした途端、

「きゃっ!？」

ドアの向こうで声がしたかと思うと、ドアがハデに開かれた。

「お茶お持ちしましたぁ!」

ドアの向こうに立っているのは、お盆を持った琥珀と、バツの悪そうな顔でうつむく綾乃だった。

「あ、綾乃ちゃん？」

「瀬戸さん、どうして？」

「あ、あの……」

驚いて腰を浮かした水瀬達の前で、綾乃が、自分の行動をどう説明しているか躊躇しているのは明らかだった。

「お姉さまと悠理君がべったりだから、心配なんですよね？ ね!？」

「……」

琥珀のストレートな言い方に、綾乃は赤面して小さくなるしかない。

「とにかくお茶です——へえ？ 綺麗な金細工ですね」

テーブルにお盆を載せた琥珀が水瀬の手に乗った金細工に目をとめた。

「どうしたんです？」

「あ、これね？」

水瀬から、犠牲者の遺留品で、今後の重要な手がかりになるかもしれないと聞いた琥珀は目を輝かせた。

「まるで推理小説！」

「ははっ。そうかもね……綾乃ちゃん？」

水瀬は、ドアに立ったままの綾乃に声をかけた。

「お茶、飲もう？」

「は、はい！」

ようやくバツの悪い思いから解放された綾乃が嬉しそうに水瀬と美奈子の間に割り込むようにしてお茶に手を伸ばした。

「それで」

綾乃と暗黙の内に押し合いながら、美奈子は訊ねた。

「何で、弓矢と眼鏡なんですか？」

「それは俺が知りたいよ」

岩田は肩をすくめる。

「名探偵のお知恵をお借りしたいと思ってるんだが？」

「……ううっ」

さすがに美奈子も首を傾げざるを得ない。

これは犯人から自分に対する挑戦とっていいだろう。

だが、答えがわからない。

弓矢と眼鏡？

どういうつながりが？

「……弓……眼鏡……目」

ぼつりとした声が美奈子の耳に届いた。

綾乃だった。

「ああ」

ポンッ。

綾乃は感心したように手を叩いた。

「成る程」

「せ、瀬戸さん？」

「はい？」

「な、何が成る程なの？」

「桜井さん、推理小説がお好きと聞いていたんですけど？」

綾乃は意地が悪い顔で美奈子を見るが、美奈子はその言葉の意味が思いつかない。

「……くすっ。助け船を出した方がいいみたいですわね」

困惑する美奈子の顔を見た綾乃は、小さく吹き出すと言った。

「マザーグースですよ」

「マザーグース？」

「聞いたことはありません？ “誰が駒鳥殺したの”」

「……教えて」

「いいですよ？」

こほん。

小さく咳払いした綾乃が歌うように詩を朗読した。

誰が駒鳥殺したの？

わたし、とすずめがいった

わたしの弓矢で

わたしが殺した

誰が駒鳥死ぬのを見たの？

わたし、と蠅がいった

わたしのこの眼で

死ぬのを見た

誰がその血を受けたのか？

わたし、と魚がいった

小さな皿で

わたしが受けた

誰が経帷子作るのか？

わたし、とかぶと虫がいった
針と糸とで

わたしが作る

誰がお墓を掘るのか？

わたし、とフクロウがいった
すきとシャベルで

わたしが掘ろう

誰が牧師になるのか？

わたし、とカラスがいった
聖書を持ってる

わたしがなろう

誰がおつきをしてくれる？

わたし、とヒバリがいった
真っ暗闇でなかったら

わたしがおつきに なりましょう

誰がタイマツ持つのかな？

わたし、とベニスズメがいった
お安い御用だ

わたしが持とう

誰がお悔やみ受けるのか？

わたし、と鳩がいった
愛ゆえ深いこの嘆き

わたしがお悔やみ受けましょう

誰がお棺を運ぶだろう？

わたし、とトンビがいった

もしも夜道でなかったら

わたしがお棺を運びます

誰が覆いをささげ持つ？

ぼくら、と言ったはミソサザイ

夫婦二人で

持ちましょう

誰が讃美歌歌うのか？

わたし、とツグミがいった

小枝の上から言いました

わたしが讃美歌歌います

誰が鐘を突くのかね？

わたし、と牡牛がいった

なぜならわたしは力持ち

わたしが鐘を突いてやる

かわいそうな駒鳥のため

鳴り渡る鐘を聞いたとき

空の小鳥は一羽残らず

ため息ついてすすり泣いた

「……といっても」

綾乃はバツが悪そうに言った。

「私も仕事で覚えたんですけどね？」

「ち、ちょっと待って」

驚いて席を立ったのは水瀬だ。

「っていうことは」

「……そうね」

腕組みした理沙が頷いた。

「雀と蠅は殺された……」

その言葉に、皆がハツとなる。

「つまり」

そんな馬鹿な。

皆がそう思いつつ、理沙の言葉を待つ。

葬儀を執り行う司祭の如き神妙さで、理沙は言葉を紡いだ。

「これは……連続殺人の予告。私達に対する宣戦布告よ？」

第七話（後書き）

青酸カリとか、毒物はいい加減な設定です。タバコに仕込んで青酸ガスが発生するかどうかは、演出で片づけてください。お願いします。

第八話

「どうということなんだ！」

皆が集まった応接間で怒鳴り声をあげたのは、アルマーニのスーツに身を包んだ佐伯だ。

「君は警察官だろう！犯人をどうしてすぐに逮捕しない！」

「未だ鑑識の結果も出ていません」

全員の前に立つ岩田は冷たくそう言い放った。

「事件解決までには時間がかかります。早い解決を願うのでしたなら、警察に協力を」

ハアッ……。

何と言っているのかわからないという顔の佐伯が大きくため息をつくとき、苛立たしそうに応接間を歩き回る。

「……誰なんだ」

その佐伯の言葉に、皆が黙る。

「何で黙ってるんだ！」

「佐伯さん」

岩田が佐伯の肩を掴んだ。

「少し落ち着いてください」

「落ち着けだ！？」

乱暴に岩田の手を払いのけた佐伯は岩田を睨む。

「おかげでこんな所に閉じこめられて！え！？警察は俺達全員を容疑者として、事件解決するまで拘束するつもりだろ！？えっ！？」

「……おっしゃるとおりですが」

岩田は佐伯をまっすぐにらみ返しながら言った。

「その容疑者の中には、私も含まれているのです。そして」

岩田が佐伯を促すように視線を周囲に動かす。

ソファーに座る鈴蘭、品田、佐伯の妻、そして綾乃。

壁際には、新田達が控えている。

「皆が同じなのです」

「……ちっ！」

岩田はともかく、家令の新田を除けば、他はみんな女だ。性別、年齢、社会的地位、すべての面で佐伯と肩を並べられる存在はいない。

一般に、こういう時、最も落ち着いて行動すべきが誰か。

佐伯だってわかる。

それだけに、佐伯は面白くないという顔でそっぽをむいた。

「もう一度、おうかがいしましょう」

岩田は佐伯から視線を外し、ポケットからビニール袋に入ったタバコの箱を取り出した。

「みなさん、このタバコに心当たりは？」

東が手を挙げた。

「それは鈴蘭様がひろったと私に」

「……わ、私」

品田に手を握ってもらい続ける鈴蘭は、おびえきった声で言った。
「車の中で使っていた袋の中に入っていたので……てっきり、先生のポケットから落ちたのかと思って」

「刑事さん」

鈴蘭の手を握る品田が言った。

「鈴蘭ちゃんは……その、見たとおりや。せやから、そんな疑いは」「これは職業柄だよ」

岩田はやりわりと言った。

「誰でもまず疑う。それが鉄則なんだ」

「せやかて！」

「無論、鈴蘭さんがやったとは思えたくはない。だからこそ、何か有益な情報が欲しいんだ」

「目が不自由いうだけで十分や！」

品田は立ち上がると、岩田に怒鳴った。

「何や！警察はそこまで情けっちゅーもんを持っておらんのか！？」
「いいかい？生存する中で、毒入りのタバコを手に行っているのは鈴蘭さんと東さんだけなんだ。どこで毒物が混入したかを知る上でも、事情を聞くことは大事なことなんだよ」

「んなこと……わかっとなるがな」

分が悪いと判断したのか、品田はそっぽをむいた。

「鈴蘭さん」

「は……はい」

「思い出したことがあれば何でもいい。私達に教えてほしい。出来るね？」

「……」

鈴蘭は無言で頷いた。

品田が鈴蘭をしきりに励ます様子を見る美奈子の小脇をつついたのは東だ。

「時間が時間です。そろそろお茶の準備を」

時計はすでに3時近くだ。

気がつけば昼食をとっていない。

「あ、はい」

美奈子達メイドは物音を立てないように応接間を後にした。

「参ったわね」

廊下を歩きながら、東は肩をすくめた。

「こんなことになるなんて」

「噂で聞きましたけど」

東の後ろを歩きながら、美奈子は東に訊ねた。

「財団では最近」

「桜井さん？」

東はまっすぐ廊下の奥を見ながら言った。

「どこかの文屋さんみたいなことは言わないの」

そのきっぱりとした声に、美奈子は反論さえ出来なかった。

「は、はい……すみません」

「確かにそういう噂はあるけど」

怒っていると思った美奈子の前で、東は優しげにほえんだ。

「私達は、自分の仕事に誇りを持ってやればいい。ただそれだけ。それだけが大事ななのよ？覚えておきなさい」

「は……はい！」

そうだ。

美奈子と思う。

雇い主が浮気しようが何しようが、私は今、メイドとしてここにいるんだ。

雇い主のことより、自分に与えられた仕事をこなすことが大切な立場なんだ。

仕事とは、雇い主が快適に過ごすための全てをこなすこと。それこそが大切なことなんだ。

「さ……ちよつと位、味見もあるのですし」

「えっ？」

「お客様に出す前に、味見するのも務めですよ？」

東は悪戯っぽくウィンクしてそう言った。

「ふふっ。つまみ食いっていいませんか？」

「メイドの言葉で、つまみ食いを味見というんです」

笑いながら入った厨房は、空腹にはたまらない匂いに満ちあふれていた。

「うわぁ」

琥珀と水瀬が歓声を上げ、

クウウウツ……

美奈子のお腹が鳴る。

「お姉さま、はしたない」

「だ、だって！」

琥珀の冷たいつつこみに、美奈子は赤面して抗議した。

「こんなおいしそうな匂いしたら！」

美奈子の目の前には、ミートパイが湯気を上げていた。

「ははっ。お嬢ちゃん達のはこっちだ」

厨房に立つ岩瀬がトレイに載せられた皿を差し出す。

すでに切り分けられたミートパイ。

きつね色にやけたパイ生地といい、切れ目からあふれる肉汁といい、かなり美味そうだ。

「あ、ありがとうございますっ！——あれっ？」

皿を受け取った美奈子は、厨房の隅に立つ東に気づいた。

「東さん？」

美奈子達に背を向ける東が口元をおさえ、背筋を伸ばした。何かを飲み込んでいる姿勢だと、美奈子はすぐに気づいた。

「薬ですか？」

「……ああ、ごめんなさい」

東は、コップテーブルに置くと、手にしていたピルケースを引き出しに入れた。

「花粉症気味でね。薬が手放せないの」

「へっ。更年期障害の薬の間違いだろう」

岩瀬は包丁を研ぎながら意地の悪いことを言う。

「私はそんな歳じゃありませんっ！」

東はムキになって答える。

「岩瀬さんこそ、バイアグラが手放せないんじゃない？」

「へっ！ なしでも俺の大砲は全開だぜ！ 試してみたきやいっつでもいいな！——おっと、東さんみたいなおばさんあいてにや、厳しいがな」

「こっちからお断りですよ！」

「違えねえ！」

アハハハッ

ガハハハッ

東と岩瀬が同時に吹き出すのを見て、美奈子はちよっただけ安堵した。

二人の関係は、軽口をたたき合うケンカ友達というところだと見当をつけたからだ。

「さ、お嬢ちゃん達、さっさと味見して、お嬢様達ん所へ持つていってくれよ!？」

「はあい」

美奈子が皿にフォークを突き立てようとした途端、ひよい。

パイが皿から消えた。

「モグモグ……おいしい!」

琥珀の仕業だった。

「ううっ……痛いですう……」

トレーを持った琥珀が涙目でそうぼやくのも無理はない。

琥珀の頭には今、でつかいたんこぶが出来ている。

無論、犯人は美奈子だ。

「食べ物の恨みは恐ろしいんだから!」

「いくら何でもぐーで殴らなくても」

「うるさいっ!」

グーグー鳴るお腹を押さえながら、美奈子は怒り心頭という声をあげた。

「今晚の夕飯、覚悟なさいっ!」

「私は育ち盛りなんですう……」

「私だってそうよ!」

「ううっ……お姉さまはおっぱいに脂肪蓄えてるからいいじゃないですかあ」

「よくないっ!」

結局、

給仕する間も鳴り続けるお腹のおかげで、品田どころか佐伯夫婦にまでからかわれ、鈴蘭から気の毒がられ、東から小言を食らった

美奈子は、逃げるように応接間を出るハメになった。

腹の虫なんて年頃の娘が他人に聞かれないものじゃない。

しかも、相手の中には、不特定多数だけじゃなく、水瀬がいるのだ。

恥ずかしさのあまり、美奈子は廊下の影で少しだけ泣いた。

そして――

「東さんっ!」

水瀬の声。

悲鳴。

「医者だ医者!」

「吐かせろっ!」

叫び声。

応接間から様々な音が美奈子に届いたのは、美奈子がしゃがみ込んで泣いている。

そんな頃だ。

「?」

まさかとは思った。

東が何か失敗したのか?

それとも、琥珀ちゃんが失敗して、東さんに何かあったのでは?

それくらいしか思うことが出来なかった。

それでも――

美奈子は立ち上がると、応接間のドアを開いた。

応接間の一角に全員が集まっていた。

その脚と脚の間から、誰かが倒れているのが見えた。

メイド服。

脚の長さから、それは一人しかない。

東だ。

「あ……東さん？」

ふらつく足取りで東の元へと近づいた美奈子は、確かに見た。

口元から血を流し、白い顔をする東の顔を。

その頭を抱きかかえるようにして何かを調べていた水瀬が、首を横に振った。

「……午後3時12分……村田、記録しておけ」

「……はい。鑑識、すぐに呼びます」

岩田の声に頷いた理沙が電話に近づくのと入れ替わる形で、美奈子は東の側に座った。

さつきまで優しい微笑みを浮かべていた顔は、苦痛に歪んでいた。

東が今、どうなっているか。

それは言うまでもない。

ただ、それが、どうしても信じられない。

「……水瀬君」

美奈子は、やっとそれだけ言えた。

「……東さんは、パイを食べていない」

水瀬は言った。

「もし、パイに仕込まれていたら、僕達もアウトだよ」

「毒……殺？」

「そう」

水瀬は頷きながら、東の体を調べ始めた。

「仕込まれていたのは、さつき飲んでいた薬の中だね。青酸カリだ
と思うけど……あつ」

それは、エプロンドレスのポケットに入っていた。

水瀬は唇をかみしめながらエプロンドレスのポケットからそれを

つまみ出す。

「……これ」

開かれた手のひらに乗っているのは、金細工。
皿の形をしていた。

「マザーグースですね」

真っ青になった綾乃が言った。

「マザーグース？」

佐伯がそれを聞きとがめた。

「どういうこった、そりゃ」

「……」

綾乃は少しためらうと、歌い出した。

マザーグース

誰が駒鳥を殺したの？

その一節を——

「誰がその血を受けたのか？

わたし、と魚がいった

小さなお皿で

わたしが受けた」

第9話

ザアッ

闇が世界を支配するのと同時に襲いかかってきた嵐。

激しい雨が窓を叩く中、美奈子達はそのドアを閉じた。

東の私室として割り当てられていた部屋。

部屋のベッドの上には、東の亡骸が顔に白い布をかけられて眠っている。

ガチャ

カギをかけ、美奈子は隣にいた理沙の顔を見た。

理沙は硬い表情のまま、無言で頷く。

美奈子も頷き返すと、手にしたランタンを掲げながら東の部屋から離れた。

「ダメだね」

水瀬が濡れた髪をタオルでぬぐいながら言った。

「道が崩れちゃってる」

「行き来できないの？」

「うん。この雨で崖が崩れたんだね。電線もそれで切れていたよ」

「予備発電はないの？」

「岩淵さんに聞きましたけど」

琥珀が言った。

「発電機が丁度、修理中で、台所の冷蔵庫位しか電気が使えないそうです。全館の照明が使えるほどの発電を行うには、一晩位はかかるそうです。ガスは使えるそうですけど」

「ふうん？つまり、道路は寸断されて、ここから逃げることも救援を呼ぶことも出来ない。電線が切断されて停電起きてるけど、これは一晩は直らない」

「岩淵さんも頑張ってますよ！」

琥珀はムキになって言った。

「岩田さんや佐伯さんも応援に行ってます!」

「別に岩淵さんが悪いって言ってるわけじゃないわ?」

「むう……」

頬をふくらませた琥珀に、水瀬が言った。

「それより、さっさとご飯作ろう? ガスはあるんだから」

水瀬達は台所下の地下室へと缶詰をとりに入った。

ひんやりとした空気が体にまとわりつくような、嫌な雰囲気が入る者達に容赦なく襲ってくる。

「あんまり、長居したくないわね」
ずらりと並ぶ棚。

あまり利用しないのか、半分以上が空になっている。

その中で、美奈子が水瀬に抱きつかんばかりの格好で歩いていた。
「そうだね……さっさと片づけようか」

水瀬は、あたりをきよろきよろすると、ようやく目的の棚を見つけた。

「えっと? キャビアはこれだね」

「何でこんな時にキャビアなんて」

「あの料理には不可欠だもん。それに、あの食材ははやく調理しないとダメになっちゃう」

「むう……」

「さ。早く戻ろう? 上で琥珀ちゃんが待ってる」

水瀬は棚の箱から取り出したキャビアの缶詰を数個、キャンバス布製の手提げバックに入れると、美奈子に振り向いた。

「そうね」

美奈子もそれに異存はない。

こんな嵐の夜、地下室になんて長居したいとは思わない。

美奈子が頷いて歩き出した時だ。

グンッ！

水瀬が問答無用で美奈子の胸ぐらを掴むと、床に引き倒した。

「きゃっ!？」

床のひんやりとした冷たさと、うつすら積もった埃の感触が、美奈子に襲いかかった。

「なっ!？」

驚きながらも立ち上がろうとした美奈子の背を踏みつけているのは、水瀬だ。

「ち、ちよっと!」

「動かないで」

水瀬は言った。

「ちよっと立て込んでいるから」

「女の子、なんだと思ってるのよお!」

ジタバタと暴れるが、どう押さえつけられているのか、美奈子は立ち上がることが出来ない。

「服が汚れちゃう!」

「だから少し我慢して」

「何が起きてるのよ!」

「みたい?」

「当たり前っ!」

「じゃ、どうぞ?」

水瀬が踏みつける位置を変えたおかげで、美奈子は後ろを振り向くことだけは出来た。

そして——見た。

真っ黒な装束に身を包んだ性別のわからない者が、そこに立っているのを。

そして、その手には、水瀬の手に持つランタンの光に照らされ、鈍く光る斧が握られていた。

「な——なっ!？」

「見ない方が怖くなかったでしょ？」

「早く言えっ!」

「言ってなかったっけ？」

「言ってない!」

見た以上は仕方ない。

かといって、見たからどうすることも出来ない。

逃げることさえ、出来ないのだ。

「とっとと逃げようよ!」

「あ、そうだね」

水瀬はようやく足を美奈子の背からどけた。

美奈子は、ガクガクと震える膝を酷使して、何とか這いながらも水瀬の後ろに逃げる。

「——で？」

水瀬が斧を持つ相手に言った。

「狙いは僕？それとも彼女？」

相手は答えない。

「お耳が聞こえないの？それとも、しゃべれないの？」

「……」

ブンッ!

相手は無言で斧を振りかぶり、水瀬めがけて振り下ろすが、水瀬は無造作に斧を掴む相手の腕を押さえ、投げ飛ばした。

柵と柵の間の通路を転がった相手は、すぐに脱兎のように逃げ出した。

それを、水瀬は追おうとさえしない。

「何してるの!？」

その水瀬に、美奈子は驚いて怒鳴った。

「逃げちゃう!」

「——そうだね」

水瀬は、床に転がった斧を拾いながら、それだけ言った。

「そうだね。じゃなくて!」

「僕が追いかけていって、桜井さんがここに残されるのがいって
いうなら、それでもいいよ?」

水瀬は、斧を手近な棚に置くと、美奈子に振り向いた。

「自分で自分の身が守れるっていうなら、僕は何もしない」

「あっ」

美奈子は、水瀬が何を言いたいのかわかった。

この暗闇。

地下室。

敵の目的も、敵の数さえわからない状況。

すべてにおいて、ここに美奈子一人が取り残されることが許され
る状況ではない。

水瀬は、それをわかっているのだ。

「……ごめんなさい」

「いいよ?」

水瀬は、美奈子を立たせると、エプロンドレスについた埃を払い
ながら言った。

「とにかく戻ろう?ここは少し危険だから」

「襲われた!」?

結局、水瀬が料理をつくり、全員が食卓を囲む時になっても、電
気は回復しなかった。

太い蠟燭の明かりが全ての食卓は、雰囲気があるといえはあるが、
嵐が吹きすさぶこの状況では、いたずらに恐怖心をあおるだけだ。

まして、誰かが襲われたとなれば――

「ガツガツ……モグモグ……プハッ。で?」

その中で一人、食べることを決してやめようとしなのが理沙だ。
周囲の視線を浴び、恥ずかしさのあまり視線を逸らす上司に気づ
くこともなく、理沙はナイフとフォークを使い続ける。

「相手、仕留めたんでしょね」

「逃げられたよ？」

水瀬は平然と答えた。

「桜井さんを守る方が大切」

「……役立たず」

「ぷうっ！」

「それで、水瀬君」

岩田が訊ねた。

「犯人の手がかりになるようなものは？」

「何も」

水瀬はそう言ってから、思いだしたように続けた。

「身長165センチ前後。体重は55キロ前後。右利きで、重い物はあまり持った経験がない」

「よくわかるな」

妻の皿に料理を載せながら、佐伯が感心したように言った。

「まるで探偵だ」

「探偵はこっち」

水瀬は横に座る美奈子を指さした。

「ほう？」

佐伯夫妻の興味津々の視線を受け、美奈子は小さくなるだけだ。

「鈴蘭を危険から守るために雇われた少女探偵さんか」

「そ……そんなんじゃないやありません」

美奈子は水瀬の足を力一杯踏みつけながら言った。

「私は誰の犠牲も止められていません」

「……」

皆の顔に、今日一日で死んだ二人の顔がよぎるのだろう。

理沙以外の全員の手が止まった。

「ま、佐伯さんや」

ワインで出来上がりつつあるのか。岩淵が顔を真っ赤にして言った。

「警察もいる。探偵もいる。犠牲者はこれ以上増えないぜ？」

「そう願おうか」

佐伯は、襟元を正しながら言った。

「何しろ、妻は身重なんだ」

ぽんっ。と妻の肩に手を置く佐伯と、それをはにかみながら受け入れる妻。

「ほお！」

岩淵が感心したように言った。

「やっとかい」

「ああ。結婚から7年。もう諦めかけていたんだが」

「それはそれは」

岩淵は家令の新田の顔を見た。

「新田さんよ。お祝いしなくちゃな」

「うむ……おめでとうございます」

「ふふっ……ありがとうございます」

佐伯の妻は、そっとお腹を撫でながら小さく頷いた。

「今、三ヶ月です」

大人達の社交辞令を聞き流しながら、美奈子は食事を口に運ぶ。

「水瀬君」

「何？」

視線を料理にだけ向け、美奈子は小声で水瀬に訊ねた。

「この建物」

「うん」

「誰か——私達以外に、誰かいるの？」

「可能性は否定できない」

ジュースの瓶にワインを移しながら、水瀬は言った。

「でも、誰がどうして、何の目的で？それが全く」

「そりゃ」

美奈子の視線が、鈴蘭にいく。

新田の隣。

一番の上座に座る鈴蘭は、器用にナイフとフォークを使いながら食事を続けていた。

「あの子、よく食べられるわね」

「ナイフとフォーク、それにお皿にセンサーがある」

ジュースの瓶にワインをつめた水瀬が、グラスにワインを注ぎながら言った。

「ナイフがお皿に近づけばね？センサーが作動して、どの料理かとか、いろいろと音声で、教えてくれるんだ」

「へえ？」

「よく考えたと思うよ？」

「うん」

そう言われれば、美奈子も頷くしかない。

美奈子の目の前で、品田のバカ話につきあいながら楽しげに食事を続ける鈴蘭。

可憐な娘だと思う。

そんな子が、命を狙われている現実。

それが、美奈子には受け入れられない。

「とりあえず、刑事さん」

不意に、佐伯がそう言ったのは、皆が食事を終えかけた時だ。

「大事をとって、皆、夜間は寝室にはカギをかけて休む。以降、絶対一人にならない」

「そうですね」

岩田は頷いた。

「発電機は、こうなったら明日の朝から修理に取りかかりましょう。今晚は、佐伯さんご夫妻とそのお子さんの三人で一部屋」

お子さん。

岩田の言葉に、佐伯夫妻が苦笑気味に互いの顔を見合って小さく

笑った。

「鈴蘭さんは——瀬戸さん」

「はい？」

水瀬から離れたところに座られ、すっかり腐っていた綾乃は驚いたように返事した。

「私が、鈴蘭さんと？」

「頼む」

「……はい」

綾乃は、チラリと水瀬達を睨むと言った。

「探偵さん達はお忙しいご様子ですし」

「……品田君は」

「ワイも鈴蘭ちゃんと」

「却下だ」

岩田はにべもなく言った。

「君は新田執事と岩淵さん達と行動を共にしてくれ」

「ワイはハッテン場送りかい！」

「おい兄ちゃん」

岩淵が言った。

「どういう意味だい？」

「こんなムサイおっちゃん達と一晩なんてイヤや言ったんや！」

「かーっ！このエロガキ。刑事さん。こいつぁアレだ。発電室に閉じこめておきましょうや。あそこなら安全だ」

「それでもいいな。任せるよ」

「ワイもお客様やで！」

「一人でいて、殺されてえのか？」

「う……む……」

「で、桜井さんと武原さんは同じ部屋で」

「はあい♪」

琥珀が美奈子に抱きついた。

「お姉さまぁ♪今晚も一緒ですう♪」

「心底イヤなんですけど……」

「後は、俺と村田、それと水瀬君」

「はい」

「僕も？」

「不寝番だ。せめて、亡くなられた二人の線香だけでも絶やすな」

その後、美奈子と琥珀は、佐伯夫妻を部屋まで送り届けた。

琥珀は、妊婦を初めて見たといい、佐伯夫妻に根ほり葉ほりいろいろと訊ねてばかりだ。

佐伯夫妻は、子供が出来なかったことのつらさを含め、琥珀の質問にきちんと答える。

外見は遠慮したいタイプだったが、内面はかなり優しい人達なんだと、美奈子は佐伯夫妻に対する見方を変えることにした。

「琥珀ちゃん」

散々質問してなお足りないのか、楽しげに話を続ける琥珀を美奈子が止めた。

「寒くなってきたから。これ以上、奥様をお止めできないわ？」

「あ……そうか」

琥珀は、佐伯夫人のお腹に視線を向け、頭を下げた。

「ごめんなさい」

「いえ……いいのよ」

佐伯夫人は笑って手を軽く振った。

「生まれてくるなら、あなたみたいな賑やかな子がいいなって、そう思っていたところ。ねえ？あなた」

「ああ。毎日が楽しいだろうね」

「へへっ……」

琥珀ははにかんだように笑って、美奈子に言った。

「人徳ですね」

「言ってなさい……では、何かございましたら、ベルを鳴らしてください。それでは」

「はい。お休みなさい」

「お休み。いい夢を」

美奈子達の目の前で、妻を労りつつ部屋に入る佐伯の背が部屋に入っていた。

ドアが静かに閉まる。

それが、美奈子が見た佐伯夫妻の最後の姿だった。

翌日の朝。

朝食の準備に追われる美奈子達のいる厨房へ駆け込んできたのは品田だった。

「け、刑事さんはドコや!?!」

厨房の入り口で叫ぶ品田は、明らかに狼狽しきっていた。

「どうしたのよ」

サラダを作る手を止め、美奈子が声をかけた。

「なにやらかしたの?」

「わ、ワイは何もしたらん!」

品田は息を整えながら言った。

「そ、それより」

「?」

厨房にいる全員が品田に注目する中、品田はようやくのことで言った。

「さ、佐伯さんや」

「佐伯さん?」

「わ、ワイ、鈴蘭ちゃんに頼まれて佐伯さん達起こしに行ったんや。朝のお茶を一緒につて！そ、そしたら！」

「どうしたの！？」

「ドアが開かんのや！何度叩いても！返事もない！」

「ど、どこかに外出」

ドアが開かない。

その意味はわかる。

わかるだけに、美奈子は現実から目を背けるように、自分に言い聞かせるように、品田に言ったが、

「アホか！」

品田は怒鳴った。

「敷地ん中なんて限られとるわい！ワイも探したわ！でも、どこにもおらんのや！」

「水瀬君！」

品田を突き飛ばすと、美奈子は厨房から駆けだした。

「品田君は鈴蘭さんと瀬戸さんの所へ！近くにいて！」

「わ、わわ、わかった！」

佐伯夫妻に割り当てられた部屋は二階の階段を上ってすぐの部屋。木製のドアの前には今、美奈子と水瀬、琥珀、そして岩淵がいた。

ドンドンドンッ！

「佐伯さん！」

ドアを叩きながら、何度も佐伯の名を呼ぶが、ドアの向こうからは返事がない。

カギはかかったままだ。

「佐伯さん！」

「―――どきな」

美奈子をドアから放すと、岩淵がドアの前に立った。

その手には、斧が握られていた。

「やりたくねえが、仕方ねえ」

ペツ。と手に唾を吐きかけ斧の柄を握りなおした岩淵が、ドアめがけて斧を振り下ろした。

ガンッ！

ガンッ！

破片をまき散らしながら、ドアが壊されていく。

その様子が、美奈子には恐ろしくまどろっこしく感じられてならない。

「ちょっと、何の騒ぎ？」

佐伯夫妻の部屋の3つ隣の部屋のドアが開き、中から理沙が眠そうに目をこすりながら顔を出した。

「うるさいわよ？」

「理沙さん！」

美奈子が怒鳴った。

「佐伯さんが起きてこないんです！」

「はぁ？朝寝してるだけじゃないの？」

「これだけの音立てても、返事もない！」

「……」

さすがに意味がわかったのか、理沙の顔は凍り付いた。

「——参ったわ」

パジャマ姿の理沙はバツが悪そうに言った。

「岩田警部もいないのに」

「警部、どこへ？」

「朝方、周囲を調べてくるって出たっきり」

「単独行動禁止でしょう？」

琥珀が呆れたように言ったが、

「警部は警官よ？」

理沙にあっさりと答えられ、琥珀も返事に詰まった。

ガンッ！

ガチャガチャ

「よし開いたぜ！」

ドアによりやく開いた穴から手を突っ込んだ岩淵が、ドアノブを開いた。

美奈子はすぐに入ろうとするが、

「待ちな」

岩淵が止めた。

「何かあってからじゃ遅せえ——まずはオトコの俺が行く」

岩淵はそう言って、部屋へ入り、そしてすぐに足を止めた。

「……」

「岩淵さん？」

「……お嬢ちゃん」

「はい？」

「こういうの……なんて言うのかな」

岩淵はそう言って、ドアを大きく開いた。

室内の様子が一目でわかる。

ベッドの上に横たわる佐伯夫人。

椅子に座り、およそこの部屋にはそぐわない物を抱えながら、ぐったりとしている佐伯氏。

ともにパジャマ姿だが、その肌に生氣はない。

「……」

おびえながらも美奈子はそれを見つけた。

胸の上で組まれた佐伯夫人の手が掴んでいる物。
そして、佐伯氏が抱えている物。
その意味を。

「こ、こりゃ一体……」

「……」

「あ、嬢ちゃん！」

驚く岩淵を後目に、美奈子は佐伯夫妻へと近づき、そして見つけたのだ。

「……水瀬君」

「へ？」

「マザーグースの続き、何だっけ？」

「え？」

きょとんとした顔を見せた水瀬だったが、美奈子は何を言いたいのかわかったんだろう。

はっ。とした顔はすぐに緊張のそれに変わった。

「一つ分？」

「ふたつよ」

美奈子の眼には、佐伯夫人の握る金の針が映し出されている。

水瀬がマザーグースの続きを口ずさんだ。

誰が経帷子作るのか？

わたし、とかぶと虫がいった

針と糸とで

わたしが作る

誰がお墓を掘るのか？

わたし、とフクロウがいった

すきとシャベルで

わたしが掘ろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6263d/>

安楽椅子に寝そべって 瞳の中の闇

2010年10月10日15時18分発行